

「シンポジウム」

台湾史研究における台湾総督府文書目録編纂の果たした役割

松 金 公 正

はじめに

中京大学社会科学研究所は、一九八二年から台湾総督府の行政文書である「台湾総督府文書」の目録編纂事業を行ってきた。本稿では、目録編纂に伴い遂行された調査、研究活動が、台湾史研究にいかなる役割を果たしてきたのかについて検討を加えたい。

台湾総督府目録編纂が台湾史研究に果たした役割の特徴を一言で表すと、それは、「際（キワ）」と「幅（ハバ）」という言葉に集約される。つまり、目録編纂という行為は、それに関係する研究者の学問領域の際をつなぎ、専門領域の異なる研究者を包摂することによって研究の幅を広げ、台湾史研究の学際性を高めたのである。

一・「台湾」という背景

目録編纂が始まった一九八二年における「台湾」の位置づけは、現在とは大きく異なっていた。現在でこそ、文理問わずさまざまな学問領域の研究者が相互に訪問し、調査、共同研究を行うなど、学术交流が盛んな日本と台湾であるが、一九九〇年代までは、必ずしもそのような状況ではなかった。歴史研究においては、日本史においても、東洋史においても、近代史研究において台湾をテーマとして取り上げることが、植民地統治の肯定や中華人民共和国への批判などと解釈されることも多く、簡単ではない状況にあった。

二・編纂からの出発

上記のような状況の下、目録編纂は開始された。そこで代表者である檜山幸夫が目指したものは、単に目録を採録するというものではなかった。原本実見調査、目録形式、採録語の決定、個別研究、学術報告、出版（目録・論文集等）、という段階を経て、世に公表するという過程がそこにはあった。そしてそれは、本来台湾の人々の共有財産である行政文書を、如何に人々の生活の中で意義あるものとして提示していくのか、という精神の下進められた。結果として『台湾総督府文書の史料論』(二〇一八)にある通り、調査はこれまで三六年間、七〇回に及んでいる。これだけの長い年月を要することになったのは、史料群の物理的分量の多さということもあげられるが、台湾の政治的、制度的な問題も深くかかわっている。しかし、時間の経過が果たした意義は極めて大きい。

目録編纂が継続される中、同時に新たな台湾統治史研究が生み出され、日本近代史研究や資料科学研究においても新たな知見を与えることになった。また、その研究の主体には、日本近代史研究者もいれば、東洋史研究者もいた。学部生や大学院生など若手もいれば、年長の研究者・専門家もいた。専門も中国史や日本史などの歴史研究者にとどまらず、他分野の研究者や日本近代文書解読の専門家まで多岐にわたった。通常は、共同研究を行うことのない者同士が、目録編纂という場において、共通課題に協働して向き合う姿がそこにはあったのである。つまり、目録編纂が長期にわたったからこそ、研究組織構成メンバーの「幅」が広がっていったといえる。

他方、目録を作成するには資金が必要であった。そのため、各種資金にエントリーし、獲得することになる。そして、その報告書の作成などの機会が、更なる学際的融合を生み出すことになる。また、近年アーカイブの電子化が急速に進み、資料科学の専門家やアーカイブ技術者との接点も生まれてきた。つまり、各学問の「際」をつなぐ存在として、台湾総督府目録編纂は継続して機能してきたと言える。

三．社会的貢献から研究体制の整備

上記、資金の獲得は、研究成果だけでなく、社会的貢献にもつながっていった。台湾近代史料研究会などを組織し、日台双方で文書解読の講習会を行い、目録編纂の経験を踏まえ、台湾の研究者が日本近代文書の解読を次の世代へと伝えるという試みがなされた。

さらに研究においては、史料論や個別研究にとどまらず、目録編纂過程で収集されてきた台湾とかかわりのある日本所在の史料、台湾所蔵であるがあまり使われてこなかった史料などが集積されるとともに、日台の双方の研究

者による成果が国際シンポジウムなどを経て、社会科学研究所叢書などに結実していった。

そして、二〇〇八年には、台湾史の研究とその成果の公開、台湾総督府文書の史料学的研究、台湾総督府文書目録の編纂と刊行、台湾総督府文書目録検索データベースの構築と提供、台湾史に関する共同研究の推進、台湾史に関する研究者の育成と研究支援などを設置理由として社会科学研究所内に台湾資料研究センターが設置されることになった。

おわりに

目録編纂の行為という側面に着目し、日本の台湾史研究に果たした役割を整理した。編纂には多くの時間と人手を要し、資金獲得も不可欠であった。そのため、長い年月を要することになったが、一方で時間が長く経過したからこそ、幅広い人が集積され、新たな学際的共同研究や人材育成、そして資料の保存・管理・提供を目的とする機関の設立などへと展開していくことになった。

つまり、目録編纂は日本の台湾史研究の中で、「際」に存在するハブとしての役割を担い、学際的可能性を生み出すとともに、東アジア研究やの中にとどまらずに台湾史研究を位置づけることができるのかという視点を生みだし、台湾史研究の「幅」を広げたと言える。今後、このような幅広の視点を生み出す目録編纂をどのように続けていくのが課題である。

参考文献

- ・台湾史研究部会編『台湾の近代と日本』中京大学社会科学研究所【社研叢書一三】、二〇〇三年
- ・台湾史研究部会編『日本統治下の台湾の支配と展開』中京大学社会科学研究所【社研叢書一五】、二〇〇四年
- ・中京大学社会科学研究所台湾史料研究会編『日本領有初期の台湾…台湾総督府文書が語る原像』中京大学社会科学研究所【台湾史料叢書】【社研叢書一七】、二〇〇五年
- ・台湾史研究部会編『現代の公文書史料学への視座』中京大学社会科学研究所【社研叢書一九】、二〇〇六年
- ・中京大学社会科学研究所台湾史料研究会編『領台初期の台湾社会…台湾総督府文書が語る原像(一)』中京大学社会科学研究所【台湾史料叢書】【社研叢書二〇】、二〇〇八年
- ・中京大学社会科学研究所台湾史研究センター編『台湾行啓記録』中京大学社会科学研究所【台湾史料叢書】【社研叢書二五】、二〇〇九年
- ・中京大学社会科学研究所台湾史研究センター編『明石元二郎関係資料』中京大学社会科学研究所【台湾史料叢書】【社研叢書二六】、二〇一〇年
- ・檜山幸夫編『歴史のなかの日本と台湾…東アジアの国際政治と台湾史研究』中京大学社会科学研究所【社研叢書三五】、二〇一四年
- ・檜山幸夫編『転換期の台湾史研究』中京大学社会科学研究所【社研叢書三七】、二〇一五年
- ・檜山幸夫編『台湾植民地史の研究』ゆまに書房、二〇一五年
- ・中京大学社会科学研究所台湾史研究センター編『台湾総督府文書の史料論』中京大学社会科学研究所【社研叢書四三】、二〇一八年
- ・中京大学社会科学研究所台湾史研究センター編『台湾総督府の統治政策』中京大学社会科学研究所【社研叢書四四】、二〇一八年
- ・檜山幸夫編著『帝国日本の展開と台湾』創泉堂出版、二〇一一年

以上